

要望書

日本皮膚科学会 御中

謹啓、日頃各種学会活動ではお世話になっております。厚く御礼申し上げます。

さて、日本皮膚科学会が作成したアトピー性皮膚炎治療・診療ガイドラインには、ステロイド外用剤の副作用である、**依存 (Steroid addiction)** や**リバウンド**についての記載がありません。

古くは Dr. Kligman の臨床観察によって、アトピー性皮膚炎患者では、ステロイド外用剤による依存が生じやすいことが警告され¹⁾、日本でも 1991 年に榎本充邦医師によって離脱時のリバウンド現象が「Steroid withdrawal syndrome 様症候群」として報告されています²⁾。

2006 年、イギリスの皮膚科医 Dr. Cork によって、ステロイド外用剤が、一方では強い抗炎症作用を発揮するものの、その一方では、表皮バリア機能を破壊するというメカニズムが解明され、依存・リバウンドは、ステロイドの長期連用に伴う、皮膚という臓器特有の有害事象と考えられると報告されています³⁾。

これに伴い、非ステロイドのアトピー性皮膚炎治療新薬や、旧来の抗ヒスタミン剤、古典的なタール系外用剤の研究においても、ステロイド外用剤の長期連用にとまなう依存・リバウンドという副作用の存在は、既に前提とされており、これらの薬剤がステロイド外用剤のような依存・リバウンドを起こさないことの確認や、ステロイド外用剤によるリバウンドを軽減するという薬理効果の発見に力が注がれるようになりました⁴⁾
⁵⁾。

しかしながら、日本皮膚科学会のアトピー性皮膚炎治療・診断ガイドラインには、今もって、ステロイド外用剤の長期連用による、依存・リバウンドについての記述がまったくありません。このままでは、日本皮膚科学会に所属する医師自身が、ステロイドによる依存・リバウンドへの配慮を欠くことで、患者を予期せぬ負担や苦痛へと追いやってしまう状況が続く恐れがあります。

わたしは、日本皮膚科学会に所属する医師の一人として、この状況を憂い、**日本皮膚科学会の作成するアトピー性皮膚炎治療・診療ガイドラインに、ステロイド外用剤の副作用として、依存・リバウンドの記述を、早急に付け加えて頂くよう、ここに要望書を提出いたします。**

謹白

平成 22 年 2 月 22 日

References

- 1) STEROID ADDICTION. AM. KLIGMAN, PJ. FROSCH, International Journal of Dermatology Volume 18(1974) Issue 1, Pages 23 - 31
- 2) ステロイド外用剤による Steroid Withdrawal Syndrome 様症状について (Steroid Withdrawal Syndrome by Topical Corticosteroid)
榎本充邦、荒瀬誠治、重見文雄、武田克之 香粧会誌 Vol.15 No.1(1991)
- 3) New perspectives on epidermal barrier dysfunction in atopic dermatitis: Gene-environment interactions. MJ Cork etc. J ALLERGY CLIN IMMUNOL Volume 118, Issue 1, Pages 3-21 (July 2006)
- 4) Blockade of Experimental Atopic Dermatitis via Topical NF- κ B Decoy Oligonucleotide. Maya Dajee etc. Journal of Investigative Dermatology (2006), Volume 126
- 5) Olopatadine hydrochloride suppresses the rebound phenomenon after discontinuation of treatment with a topical steroid in mice with chronic contact hypersensitivity. T. Tamura etc. Clinical & Experimental Allergy, Volume 35, Number 1, January 2005 , pp. 97-103(7)